

3-15 第 15 分科会「小学校外国語活動教材開発」まとめ

担当 若有保彦

分科会テーマ	小学校外国語活動教材開発
担当者・メンバー	担当者 若有保彦 メンバー(13名) 安達勝裕、伊藤果歩、菅野綾、木元博之、柴田英亮、柴田良隆、高橋裕子、中林侑大、樋渡実由梨、堀井和洋、松川若菜、松山雅一、岡田麻美
活動の概要	本グループでは小学校外国語活動で使用する教材の開発に役立つ情報を収集し、分析、考察を行った。具体的には、(1)日本と諸外国の教育制度の比較、(2)日本と諸外国の教材の比較、(3)小学校外国語活動の実際、の3つのテーマについて、小グループに分かれて研究を進めてきた。
活動のプロセス	<p>「日本と諸外国の教育制度の比較」をテーマにした小グループでは、他国がどのような英語教育を行っているのかについて、日本と比較しながら調査した。調査対象として、アジアの国である中国、韓国、それに加えヨーロッパの国であるフランスを取り上げた。調査項目としては各国の小学校の外国語活動の開始年度、及び教育目標と授業時数を取り上げた。</p> <p>「日本と諸外国の教材の比較」をテーマにした小グループでは、各国の英語力の差は教育的な立場から見てどの段階から発生するのか探るため、小学校の教科書を比較した。比較する国は、日本とは違い、母国語が英語に近いフランス、母国語が日本語に近いにも関わらず TOEIC などの様々な英語のテストの成績が日本よりも高い韓国を選んだ。教科書比較の観点として単語数、教科書のスタイル及びねらいを選んだ。</p> <p>「小学校外国語活動の実際」をテーマにした小グループでは、秋田市の小学校に訪問し、外国語活動の実態について調査した。授業への児童の参加の様子や、教師の指導の手立てなどの観点から参観した。同時に教師と児童に外国語活動に関するアンケート調査を依頼し、教師が直面している問題や指導にあたる際の工夫や留意点、また児童に、英語に対する関心や意欲、中学の英語の授業への期待について回答していただいた。その結果と参観内容をもとに、外国語活動の実態に関してまとめ考察した。</p>
まとめ	活動全体を通して学んだことは、外国語教育はその国の現状によって、扱う言語や教育目標が異なり、よって教科書で扱う内容に差が生じ、語学検定に能力差が生まれるということだった。また日本に関しては、実際の授業を行うにあたり、教師が抱える課題が多くなるということがわ

	<p>かった。</p> <p>英語教育制度の比較から、他の国が中学年くらいから開始しているのに対し、日本の外国語活動の開始学年は遅く、五年生からということ、また内容や時数も他国と比べ少ないことを知った。教科書の比較からは、調べていく過程でそれぞれの教科書の単語数やスタイル、ねらいなどに様々な違いが見られることがわかった。特に単語数は日本が 65、韓国が 241、フランスが 1190 と大きな差が見られた。また、フランスは文章の量が圧倒的に多く、ゲームのような活動が少ない作りになっていた。調査の結果、日本の教科書は楽しむことに重点がおかれているが、もう少し実践性を高めることが出来たならば理想的な教科書になると感じた。</p>
--	---